

を占めるという把握が、アンセルムスによって如何にするどく斥けられているかを的確に指摘された。そしてたしかに「分有」ということが、何かそのような二つの存在領域を前提とした上で、その両者を関係付ける公式として働くというのであれば、そのようなプラトニズムは、まさに「創造」*creatio* という事柄の純乎とした理解を妨げるものとして、正しく拒否されねばならないであろう。しかし「分有」というプラトンの初・中・後期をつらぬく問題は、果してそのような段階説を基幹とするものであったろうか。

メテクシス・パルウーシアという問題は、先にもふれたように、もののあること(存在・価値)に対する自然的把握の崩壊に始まる。そしてそのとき「それ自身においては正でも不正でもないものが、如何にして正しいと語られまたそうあるのか」という問が生ずる。(『ゴルギアス』467C以下参照)。そしてまさにこの問は、「それ自身ではAでも non-A でもないものをAとする」というドクサの絶えざる吟味によってのみ遂行される以上は、かのイデア論の「すべて正しいものは正そのものによって正しい」という表明は、まさしく知の成立の根拠を、すなわちあること自体の意味を語るものにはかならなかったのである。

——それにしてもわれわれは、たしかにそのような *forma* としてある存在の意味と、*creatio* そのものとの最後のなかかわりを、究極には問わねばならないであろう。(それはいう迄もなく範型因とか形相因の位置付けという単純な問題ではない。) その課題の重さをこのシュンポシオンを通じて、質問者はあらためてみずから感ずるのである。

質問 II

加藤 信 朗

御二人のディスカッションの問題点の中心を松永氏がたいへん適確に指摘して下さいだったので、私もその線に沿って、アンセルムスのテキストに即した一つの問題点を提出したい。

泉氏の所論は、いわば、モノロギオンを棄て、プロスロギオンを中心に据え、クル・デウス・ホモをテロスに置くことによって、これまでのアンセルムス理解において見過されがちだった Paradox という面のアンセルムスを前面に打ち出した点で高く評価されるべきである。だが、その反面、アンセルムスのもう一つの面、すなわち、これまでアンセルムスとして知られてきた透明な面がやや後景に退いた感がある。質問はこの点にかかわる。

プロスロギオンの論証にとって *quo maius nihil cogitari potest* という五語によって把握される事柄は不可欠である。ところが、この五語のうちに、モノロギオンの論は極めて明確、かつ、簡潔に要約されていると思われる。

モノロギオンは、さまざまなものが相互の関係において *magis*、あるいは *minus*、あるいは *aequaliter* に、何ものか、たとえば、*iustum* であると言われる時、それは同じ一つの何ものか「によって (*per*)」言われる、いや、言われるだけではなく、そのように言われるものとして「ある (*est*)」と論ずる (*Monolog.* I, 5~18)。泉氏は *per*, *ex*, *ab* 等が必ずしも明確に限定された意味で用いられていないと言われたが私はそうは思わない。少くともこの箇所では *per* は極めてはっきりした一つの形で用いられている。それはプラトンの対話篇の中でわれわれの会うものであって、われわれが何かを何かであると言っている時、この言葉を成立させているもの、この言葉を成立させている構造がここに語られているのではないか (*formatio* とは *materia* を *formare* するというようなことではなく、このような言説の成立の根拠としての *forma* に本来かかわるものではないのか)。それは松永氏が分有の構造と言ったもので、*creatio ex nihilo per aliquid* の *per* にもあらわれるものなのではないか。それゆえ、プロスロギオンの *quo maius nihil cogitari potest* の比級 *maius* はモノロギオンで *magis*, *minus*, *aequaliter* としてあらわされた述語における比級の事実、および、この比級としての述語を成立させる構造の諒解を前提し、内含している。もし、そうであるとすれば、さらにまた、これはプラトンのものであり、プロスロギオンの論証はこの五語なしには成立しないとすれば、泉氏の展開したアンセルムスのすべてがこの端初によって再びプラトンの手の内であったことにはならないだろうか。

theologia sine Platone という泉氏の問題設定は極めて大胆、かつ、重大な問題設

定である。だが、事情が上述のようなものであったとすれば、それは果して可能だったのだろうか。

アンセルムスがアウグスティヌスに含まれていた或る種のプラトンの要素を除去したのは事実である。それは何か。アウグスティヌスの哲学を構成するものとして外から内への帰向、「内化」ということがある。これは上昇の道に定位されることである。notio impressa boni や或る種の ontologisme はここにかかわるであろう。われわれはプラトンの対話篇の中でもこのようなものに出会う。それは、アイデアの認識が *σῶμα* と *ψυχή* という或る種のミュートスの枠組と共に語られ、魂が魂そのものになることによってアイデアを見ると語られる場合である。これは内体という条件の内に置かれたわれわれの現状を前提した上昇の道の上で生じてくることなのである。

アウグスティヌスが受容したのはこのようなプラトン哲学であった。それはアウグスティヌスの中に一つのパトス (*ἔρως*) として受容され、彼の全情感のうちに滲透、融合している。

しかし、この「内化」の原理はアウグスティヌスでも究極には一つの限界に行き当たっているのではないか。われわれは自己自身の内に帰ることによって自己の内に神を見出すのであろうか。否。神はそこで *supra me, in te, veritate* なるものとして出合われる。ここ *veritas* において、内と外の対比は排棄されている。そこで、ひとは存在するもの (*quod est*) の広みに入る。内化の道の終極に創造論理解が始められる (*Confessiones* 第十巻から第十一巻への推移はこれを示す)。

アンセルムスがアウグスティヌスからこの「内化」を除去したのは素晴らしいことである。彼はそこに「存在の哲学」の基礎を置いた。それは確かに一つの *Entplatonisierung* だったと言うべきだろう。しかし、そうして取り出されてきたものの中に再びもう一つのプラトンがパルーシアして来ていると言うべきではないのだろうか。